

第5回トウキョウサンショウウオ シンポジウム

2003年2月15日(土)

東京都立川市 トヨタドライビングスクール東京・ホール
JR 立川駅南口下車徒歩13分・立川市羽衣町1-3-4/Tel042-521-2580

1999年より開催されてきたトウキョウサンショウウオ・シンポジウムは、毎年全国より多数の研究者・保全活動家・ファンが集まって情報交換できる貴重な場として回を重ね、今年で5回目をむかえました。今回は、都内に生息するヒダ・ハコネといったトウキョウ以外のサンショウウオまで話題を広げると同時に、各地で盛んになってきた、保全への具体的な取り組みや、それらにともなう問題点についても紹介したいと考えています。

雑木林と谷戸田をおもな生息地とするトウキョウサンショウウオは、里山の水と緑を象徴する生き物です。彼らとの共存をともに考えるために、ひとりでも多くの方の参加を期待しています。

主催/トウキョウサンショウウオ研究会

事務局(川上洋一): 東京都あきる野市平沢473-6 Tel&FAX 042-550-0265

<http://www.comp.metro-u.ac.jp/~tamo/salamander/index.html>

プログラム

- 13:30 開場
- 13:50 開会・挨拶
- 14:00 講演 草野 保(東京都立大学)
「東京のサンショウウオ」
- 14:45 報告 五味 元ほか(川口の自然を守る会)
「トウキョウサンショウウオ・ビオトープについて」
- 15:20 休憩
- 15:40 講演 金田 正人・御手洗 望(三浦半島自然誌研究会)
「サンショウウオ保護と市民の意識(仮題)」
- 16:15 講演 川上 洋一(トウキョウサンショウウオ研究会)
「市民参加によるトウキョウサンショウウオ調査」
- 16:50 連絡等
- 17:00 閉会

閉会後に開場を移して懇親会を予定しております。



トウキョウサンショウウオ・ビオトープについて

川口の自然を守る会 五味 元他

はじめに

都内に生息するトウキョウサンショウウオについては、環境省のレッドデータリストで保護を必要とする地域個体群に指定されている。しかし保護の具体的手法は確立されていると言いがたい。その中で、開発の波は容赦無く、トウキョウサンショウウオの生息地に押し寄せている。このような状況の中で、保護の手法確立は急務である。川口の自然を守る会ではフィールド内に多くの生息地と開発地又は予定地を抱えている。そこで、目で見えて分かる多様な生物の生息空間（ビオトープ）を整備し、その中で保護のための様々な実験や試みをしてみようと考えた。土地の確保や山林、休耕田の整備など、また里山体験で培われた技術及び労力の確保、サンショウウオの生態などにかかわる学術情報など、いずれも不十分なまま、荒れた雑木林や休耕田と取り組む事になった。幸い、地域の地主、ボランティア、当会の会員、草野先生の助言などを載いて、一応の完成を見ることが出来た。2002 年の産卵期には、予想もしなかった大量産卵が起こり、卵のうは元より、成体の産卵に至る動きや幼生の生育する様を観察することが出来た。このビオトープは研究者に公開して、生態や保護策のアドバイスを受けたいと思っている。

ビオトープの概要

広さは約 2000 m²あり、休耕田が約 50%、山林が約 40%、竹林が約 10%を占めている。整備される前の休耕田は40年以上前に耕作放棄され、孟宗竹、黒竹、コウゾ、ヨシ、ノイバラなどが侵入して、足を踏み込むことも困難な状況にあった。山林は休耕田に接し、高木はクリーコナラースギの二次林で40年ほど経過している。南に開いた谷戸で、標高は190メートル、谷戸を挟む東西の尾根は240メートルほどの標高がある。山林との境界部より比較的豊かな湧水があり、休耕田の山林寄りにじめじめした個所が帯状に連なり、ここにトウキョウサンショウウオの産卵が確認されていた。今回のビオトープ作りに当たっては、休耕田に侵入した約200本の竹を切り、コウゾ、ヨシ、ノイバラなどを刈り取り、山林の下刈りを実施し、明るく開けたかつての谷戸田のイメージを回復させた。山林寄りに水路を掘り、ここをトウキョウサンショウウオの産卵場所とした。また、休耕田に接して流れる沢は産廃が捨てられていたが、これらの大部分を撤去した。

植生の回復

明るくなった休耕田にはチダケサシ、ミゾソバ、ツリフネソウ、ワレモコウ、ヒガンバナなどが花を開くようになった。また山林の林床にはヤブラン、シュンラン、ツルリンドウ、リンドウ、サイハイランなどが見られるようになった。

生物の回復

沢にゲンジボタル、サワガニ、ホトケドジョウが多く見られ、休耕田に作られた水路にはホトケドジョウ、トウキョウサンショウウオ、イモリ、ヤマアカガエル、トウキョウダ

ルマガエルなどが見られる。特にトウキョウサンショウウオについては、2003年の産卵数が223対（446個）に達した。またアオダイショウ、ヤマカガシなどのヘビ類も姿を見せた。トンボやチョウなども多く見られるようになった。



全ての作業を手作業で

動植物の保護を目的とした生物空間なので、動力機器（草刈機、チェーンソー、耕運機など）は一切使わず、掘り起こした土や倒木などの下に居る生物などにも気を配って作業した。

人造工作物を一切使わない

金属、コンクリート、プラスチックなどの人造工作物は使わない。全て竹林や山林から得られる竹材、倒木などを利用した。その利用も最小限に留めた。

自然観察に

人手を加えた以上、完全な自然とは言えないが、護岸のない沢、休耕田の水路、雑木林が一体となった極めて自然に近い空間が作り出されたのではないかと思う。この中でトウキョウサンショウウオの生態が目の前で見られ、様々な実験や観察が可能になった。当面、研究者と地元の小中学生の総合学習などに役立てていただければ幸いと考えている。2002年度に産卵数や幼生の自然界における生育状態の観察などを行ったので合わせて報告する。



市民参加によるサンショウウオ調査

川上 洋一(トウキョウサンショウウオ研究会)

自然に関心を持つ層の増加と、ボランティア意識の高まりによって、自然環境のために何か役に立ちたいと考える市民の数は増加しつつある。たとえば各地の里山で雑木林の手入れや炭焼き等を行っているグループもふえてきているのも、こうした傾向の現れだろう。これらの活動の多くは、人手が必要なものが多いため、参加者が多いほど成果が上がりやすい。同じように市民参加による生物調査も、調査員の数が多ければより効率良く行う事ができ、保全のためのデータを蓄積できると考えられる。生物相調査のように、調査員の能力差によって結果に大きな誤差が出る事もあるので、すべての生物にたいして有効とは言えないが、目標を絞り込めば、初心者集団でも成果をあげる事が可能になる。

トウキョウサンショウウオ研究会が 1998 年から続けている、東京都多摩地区におけるトウキョウサンショウウオの生息状況調査は、卵のう数のカウントという比較的容易に行える内容のためか、毎年多くの市民が参加してデータの蓄積が行われ、これに基づいて報告書も発表される等の多くの成果をあげている。

この調査は、西多摩自然フォーラム・川口の自然を守る会・丘陵のトウキョウサンショウウオを守る会・トウキョウサンショウウオを守る柚木の会などの環境保護団体と、各地でトウキョウサンショウウオを調査・研究してきた多くの個人のネットワークによって実施され、一般の市民も現在までにのべ数百名が参加している。

とくに 98 年に行われた環境庁(当時)の「種の多様性調査」では、こうした体制により、のべ 72 回の調査が行われ、都内の生息域のほぼすべてを網羅する事ができた。さらに専門の研究者の参加によって、知識や調査方法についての助言を受け、調査データの解析をする事も可能になった。

こうした調査を行うにあたっての難問は、ネットワークの形成にあるだろう。また、一般市民にたいしての広報活動も欠かせない。

さらに調査能力が一定ではない参加者に、いかに精度の高いデータを集めてもらうかといった点も問題になる。調査地点が広範囲にわたっている場合は、調査員の配置についても考慮しなければならない。市民参加型の生物調査を実施するにあたっては、さまざまなハードルがある。

今回の講演では、98 年の調査に際して、これらの問題をどのように解決し、成果に結びつけることができたかについて、具体的に紹介したい